

柳田民俗学の形成と考古研究

小池淳一

A Formation of Yanagita Kinio's Folklore Study and Archaeology Study

KOIKE Junichi

- はじめに
- ① 出発期
 - ② 形成期
 - ③ 完成期
- おわりに

【論文要旨】

本稿は柳田民俗学の形成過程において考古研究がどのような位置を占めていたのか、柳田の言説と実際の行動に着目して考えてみようとした。明治末年の柳田の知的営為の出発期においては対象へのアプローチの方法として考古研究が、かなり意識されていた。大正末から昭和初期の雑誌『民族』の刊行とその後の柳田民俗学の形成期でも柳田自身は、考古学に強い関心を持ち続けていたが、人脈を形成するまでには至らず、民俗学自体の確立を希求するなかで批判的な言及がくり返された。昭和一〇年

代以降の柳田民俗学の完成期では、考古学の長足の進展と民俗学が市民権を得ていく過程がほぼ一致し、そのなかで新たな歴史研究のライバルとしての意識が柳田にはあったらしいことが見通せた。柳田民俗学と考古研究とは、一定の距離を保ちながらも一種の信頼のようなものが最終的には形成されていた。こうした検討を通して近代的な学問における協業や総合化の問題が改めて大きな課題であることが確認できた。

【キーワード】『石神問答』、『民族』、日本人の起源、考古学、歴史研究、近代化

はじめに

近代日本における学問の形成に大学という高等教育機関が果たした役割が多であったことは周知の事柄に属するであろう。逆に大学を基盤としない近代的な学問というものが果たして可能であったか、という問いが成り立つかもしれない。そうした問いかけのなかで、浮上してくるのが本稿で取りあげる柳田國男によって主導された民俗学である。俗に柳田民俗学と呼ばれる日本の民俗研究の明治末から昭和三〇年代に至る形成過程は、若干の例外はあるものの、大学という制度がそれほど深くは関与しない稀有な例といつてよいだろう。

本稿ではそうした柳田民俗学の形成の過程を、考古研究への言及に注意しながら検討を加えてみたい。日本における考古学の形成それ自体もさまざまな問題をはらんでいるが、ここではあくまでも柳田國男の民俗学に主軸をおきながら、近代的な学問システムが徐々にかたちをなしていくプロセスを考えてみたい。

ここでは最初に柳田國男にとつては初期の著作である『石神問答』（一九一〇年）を取りあげ、そこにおける考古研究との接点を確認し、その様相を定位してみたい。次いで民俗学が民間伝承研究として学的な装いを整えていく時期、とりわけ『民族』誌（一九二五〜一九二九年）とその後の柳田の動きを中心に考えてみたい。さらに戦後、民俗学が一定の完成の域に達したかに見える時期に考古研究が柳田にどのように位置づけられていたかについても確認していこう。

民俗学と考古学との関係については包括的な検討や協業を視野に入れた方法的な模索が重ねられてきた⁽¹⁾。その一方で、互いの学問体系の形成過程に留意し、比較対照するような検討は多くはない。こうした学史研究において考古研究を対照軸として考察してみることは、文献学史以

外の学問領域を包含した広義の歴史研究の可能性を考えることにもつながるだろう⁽²⁾。本稿ではそうした点を意識しつつ、あくまでも柳田國男の研究姿勢と学問観とに寄り添うような視角で考究を進めていくこととする。

① 出発期―『石神問答』と塚の研究から

『石神問答』は柳田國男によって一九一〇年に刊行された諸国に点在する石神の性質に関する研究である。柳田が八人の先達との間に交わした三四通の書簡に注が付される形式で記述されている。全集の解題（石井正己）によれば、これらの書簡は、『遠野物語』の初稿から清書に至る時期に交わされたものということが指摘されている⁽³⁾。

柳田はその再刊序（一九四一年）で「何故に斯ういふ珍しい祠の神が盛り又衰へたかを、もう一度問題にしてみたい」（全集一―六二七）⁽⁴⁾ といひ、自ら信仰研究の問題として再評価している。ただし、それは民俗学が体系化されつつある時期になってからの位置づけであり、最初に『石神問答』が発表された時期にはやや異なった目的と意図とがあったものと思われる。

『石神問答』を構成する書簡を柳田と交わした人びとは、山中笑（号は共古、民俗的な研究の先駆者。一八五〇〜一九二八）、白鳥庫吉（東洋史、一八六五〜一九四二）、伊能嘉矩（人類学、一八六七〜一九二五）、佐々木繁（号は喜善、『遠野物語』の語り、一八八六〜一九三三）、和田千吉（考古学、一八七一〜一九四五）、喜田貞吉（歴史学、一八七一〜一九三九）、緒方小太郎（熊本の神官、一八四四〜一九二〇）、柳田の弟、松岡輝夫（号は映丘、画家。一八八一〜一九三八）の八人である。

ここでは聞き書きに基づくデータによる考察がおこなわれるのではな

く、四三に及ぶ地誌や近世の考証随筆などに基づく考察が展開され、それらの記述をもとに往復書簡の形式で知見や資料を求め、一定の結論へと進んでいく過程が提示されているといえる。課題の提示とそれに対する反応、知見の応酬というのは、実験的でユニークな試みのようであり、実は後の『郷土研究』をはじめとする雑誌を軸にした柳田民俗学の研究スタイルと通底するものがあるようにも思われる。

ここで参照しておきたいのは、こうした初期の柳田の研究とその成果発表の手法において、考古研究の知見がどのように位置づけられていたか、である。具体的に考古研究の和田千吉への質問をみてみよう。

和田への問いかけは「此頃古代住民の生活に関し少々研究を試み居候間に不審を生じ候廉二三点御教示を受け度 御煩し申上候」として、次の四項目にわたり見解を求めている。その質問の見出しを紹介し、続けて記された質問の内容を要約すると、

一 將軍塚と称する塚

諸国に存在する將軍塚に関する発掘調査の有無、名称の由来について。

二 十三塚十三本塚十三坊塚などと称する塚

これらに関する埋蔵物の内容に基づく名義の考察の有無。

三 東国にはスクモ塚と申す塚折々有之候

スクモ塚に関する調査記録の有無。

四 塚には段々年代も有之やう承り居候が

塚一般は経塚のように土中に何か埋めたものかどうか、塚と埋蔵物との関連。

とどのように整理できよう（全集一―五二七―八）。

ここで柳田が考古研究に期待しているのは石神信仰の背景ともいえるべき、塚をめぐる調査記録の有無やそれに基づく知見である。ただし、こ

れらと類似の質問は他の相手にもしているので考古研究にのみ期待していたというわけでもなさそうである。

一方で山中笑とのやりとり（柳田より一〇通、山中より八通と『石神問答』全体の三分の一近くを占めている）と比べると、それほど重いものでもなかったようにもとらえられる。柳田の『石神問答』における考古学の位置づけは、考古学という学問そのものの体系をふまえたものではなく、あくまでも民俗的な小祠の信仰や石造物、自然石によせる信仰の歴史的展開を考えようとする際の、いくつかの視点のひとつであっただろう。

それよりも、当時の柳田の方法が「諸国村里の生活には書物では説明の出来ぬ色々事象有之候中に……」（全集一―五〇四）とあるように、文字記録以外の資料とそれに着目する方法への志向、模索があるなかで、考古研究も視野に入っていたことが重要であろう。つまり当時の柳田の方法的選択肢の一つであったということができないのではないか。

黎明期の考古研究とその成果について柳田は決して冷淡ではなかった。『石神問答』と同年に刊行された『遠野物語』の一―二話には、

…石器土器の出る処山口に二ヶ所あり。他の一は小字をホウリヤウと云ふ。こゝの土器と蓮台野の土器とは様式全然殊なり。後者は技巧聊かも無く、ホウリヤウのは模様なども巧なり。埴輪もこゝより出づ。又石斧石刀の類も出づ。蓮台野には蝦夷銭として土にて銭の形をしたる径二寸ほどの物多く出づ。是には単純なる渦紋などの模様あり。字ホウリヤウには丸玉管玉も出づ。こゝの石器は精巧にて石の質も一致したるに、蓮台野のは原料色々なり。ホウリヤウの方は何の跡と云ふことも無く、狭き一町歩ほどの場所なり。（中略）此あたりに掘れば祟りありと云ふ場所二ヶ所ほどあり。（全集二―四八―四九）

と記されており、土中から出土した遺物の形態や様式にかなり細やかな注意をはらっていたことが分かる。それはさまざまな伝承の記録のなかに考古学的な検討を要する遺物や遺蹟の存在を並列させて記述し、遠野の伝承世界を叙述しようとしているようでもある。遺物や遺蹟をめぐる想像力やそれらの喚起力への注意があったと考えるてもよいように思われる。

柳田の考古研究への期待や興味は民俗学の形成期にあつてはかなりの大きな比重を占めており、そこには考古研究へのさまざまな希望も含まれていたであろう。そのことは『石神問答』に続くこの時期の柳田の研究からもうかがうことができる。それは和田千吉への質問にあるように日本各地の塚に関する研究に現れている。以下、その点についてもみておきたい。

柳田は明治四五年（一九一二）に発表した「塚と森の話」で「記録以外の歴史上の遺物」という項目を掲げて「元来日本人は比較的無口であつたが上に、記録以外の歴史上の遺物といふもの、極めて多くを残す事が少かつた。」といいながら、我々の過去を語るものとして「一方には口から耳へ伝へて行く所の村々の伝説と、他の一方には、地表に建造せられた塚と森と、半ば天然の地形を利用した巖を以て作つた土窟の類である。しかも此数者は互に相説明して居るのであつて、今日に在ては、外に求むる事の出来ない郷土史の史料を残して居るのである。」（全集二四一—一〇二）と述べている。口頭での伝承と塚や森、岩窟などを並行して取り上げ、注意すべきことを説いているのである。

また、柳田は大正二年（一九一三）に『考古学雑誌』三巻五号に発表した「十三塚の分布及其伝説」では「十三塚が葬処なりや供養処なりや他日二三の発掘によりて容易に決せらるべく戦死者を埋むと云ふ説の如きは塚は即ち墓なりと予断せし俗人の訂正なるかも知れず。併し他の一面より見れば此種の口碑は必しも一笑に付し去るべきものにも非ず。」

〔全集二四一—一四七〕とも言っており、考古研究の主要な方法である「発掘」に期待をしながらも、それだけに頼るのではなく、口碑にも注意すべきであることを主張していた。

こうした柳田の考古学に対する姿勢は、考古学の視点や方法レベルでの協業というよりも、考古研究と視線を共有しつつ、志向を異としていたということができるかもしれない。このことは、後に堀一郎との共著としてまとめられる『十三塚考』（一九四八）の初出が、この時期の『考古界』や『考古学雑誌』であつたにもかかわらず、そこでの作業や考察が、柳田民俗学の成果の一つとなつていったことからもうかがうことができるのである。

柳田民俗学の出発期における考古研究との関係は、石神や塚といった具体的な対象を取り上げて考えていくなかで育まれたといえよう。そこには方法に関する区分や棲み分けのような意識はなく、あくまでも対象へ接近していこうとする際のさまざまな方法のひとつとしての位置づけがあるだけであつた。研究の発表媒体も限られていて、考古研究を標榜する雑誌に必ずしも考古的な素材を取り扱わない問題提起的な柳田の論考が載せられ、協業の実質的な可能性が追求されていたのである。

② 形成期—「民族」とその周辺から

柳田民俗学の形成にとつて、明治末から大正の初めの時期は、後世からみるとメルクマールとなるような『石神問答』、『遠野物語』といった出版がおこなわれたものの学問形成としてはその体系や理論が追求されたわけではなかった。そうした胎動は、むしろ大正から昭和のはじめの時期に至つて雑誌『民族』の編集刊行によつて見出されるものであつた。本節ではそうした柳田民俗学の形成期における考古研究の位置づけについて、雑誌『民族』とその周辺を探つてみたい。

雑誌『民族』は大正一四年（一九二五）一月に創刊され、実質的な編集には柳田があたった。民俗学の胎動というものの、『民族』においては、民族学をはじめ、人類学や考古学、言語学さらには社会学などの論考が多く掲載され、民俗学にかかわる記事の多くは資料報告欄に掲載されていた。永池健二はこの『民族』の編集について論文欄と資料報告欄とが異なる二つの文脈に支えられていたと指摘している。⁽⁵⁾ いわゆる民俗資料を報告、提供したのは地方在住の在野の郷土史家たちであって、論文欄の執筆者は民俗学以外の、それぞれの学問における気鋭の研究者たちであった。柳田は資料報告欄に寄せられてくる原稿に細かに目を通して、一人で採否を決めていたという。一方で論文についてはときどき注意をし、注文を出すくらいだった。⁽⁶⁾

創刊号の巻頭論文は濱田耕作（青陵）の「石金両時代の過渡期の研究について」であり、広告欄には梅原末治『鑑鏡の研究』（大岡山書店）、大野雲外『古代日本遺物遺跡の研究』（磯部甲陽堂）などがそれぞれ一頁を占め、実質的な版元であった岡書院の広告欄には鳥居龍蔵『人類学及人種学上より見たる北東亜細亜』、同じく『日本周圀民族の原始宗教』、清野謙次『日本人の研究』などといった書名が並んでいる。

広告に注目すると、二巻二号と三号には小金井良精『人類学研究』（大岡山書店）が載り、三号にはそれと並んで国史講習会による「考古学講座」の会員募集の案内も掲載されている。この講座には濱田耕作を筆頭に、柴田常恵、大山柏、松村瞭、長谷部言人、小金井良精、八幡一郎、清野謙次、梅原末治、島田貞彦、高橋健自、後藤守一といった名前が並んでいる。考古研究に対して門戸は開かれているのである。

第二巻に入っても考古学関連図書の広告は途切れなく掲載されており、論文としても第二巻六号の関東には清野謙次の「日本石器時代に關する考説」、三巻三号には中谷治宇二郎による「石器に伴ふ説話の發展」が載せられている。前者は「日本石器時代の主要民族は何処より渡來せ

りや」「日本石器時代の副葬品」からなり、石器時代に焦点をしばった論考である。後者は石器や土器が文献上、どのように記述、解釈されてきたかを広く検討しようとしたものである。いずれも意欲的な論考であり、特に後者は明治の末に柳田が『石神問答』や一連の塚に関する研究で盛んに主張していた考古遺跡や遺物に関連する伝説や歴史的な解釈を視野に入れたものといえるだろう。

こうした『民族』誌の誌面構成を見る限り、柳田がこの時期に目指していた学問は決して考古研究を排除してはいないといえるだろう。それどころか、考古学をはじめとして、民俗学以外の、多くの関連諸学にスペースを割き、その意義や価値を強く認めていたといえてよい。ただ、その様相をやや丁寧に見るならば、柳田自身が微細に目を配っている資料欄に対して、論文として掲載されている考古関連の文章の位置づけはゲストともいうべき、いささか遠慮がちな位置づけのような趣がないわけではない。この点をやや時期は下るが、岡書院の社主、岡茂雄の回想から確認してみよう。

岡はこの時期に人類学、考古学や民俗研究の専門書を意欲的な企画と丁寧な装丁によって次々と送り出していた。しかし、『民族』が休刊した後、折しも世は不況の時期に突入し、出版業も苦闘も強いられていた。そのなかで、講座ものの出版に活路を見出そうとし、日本ではじめての『民族学・人類学講座』を企画したのである。岡の見るところ、「当時は、東京帝大にただ一つの人類学教室がおかれ、考古学教室も官学に二つ、私学二・三に講義がもたれるだけ」で、民俗学は柳田でさえも民間伝承論と名乗っていた時期であった。その時に「斯学の普及に最も有効な手段と信じ」「思いきってその企画の遂行に踏み切った」と回想している。⁽⁷⁾

岡はまず、柳田を訪ね、趣旨と構想を話して意見をもらい、助言を受けた。そして、京都へ行き、濱田耕作（青陵）をはじめとする京大考古学研究室の面々、さらに折口信夫、鳥居龍蔵、松村瞭、原田淑人等々の

協力も得る手はずを整えていった。ところが、そういうある日、別の出版社が岡の企画と酷似した『郷土科学講座』なる講座を発表したのである。その筆頭監修者は何と柳田國男であった。柳田は最初に顔を出しただけで、その後何の音沙汰もないことにじれて、後発の別の出版社の企画に肩入れをしたのだということがやがて判明していった。しかし、『郷土科学講座』はその出版社の営業自体がうまくいかなくなり、僅かに二冊を刊行しただけで中絶してしまっただけである。

このことを岡は後年ふり返って、

私は柳田先生の激励のお言葉による、御支援を確信しての出発であったので、民俗学関係は先生の御指示を仰ぎながら立案すれば時日はそう要しまい。が、先生のかかわりの薄い人類学・考古学関係は私が若い方々の力を借りて構想を練り、項目、お顔ぶれを、時をかけてまず固めなくてはならないと思い、奔走これ努めていたのであった。けれど先生は、私が全般に亘って、一々先生の御意向をうかがいながら進めて行くものと思っておられたであろうのに、一向に岡が顔を出さない。なんとということかと、御不興がだんだん募って行かれたと思われる。⁽⁸⁾

と、述べている。民俗学はもろんのこと、人類学・考古学全般にわたって見識を有するという矜持を持つ柳田と、人類学・考古学については柳田のかかわりは薄い、と判断した岡とのボタンの掛け違い、見解の相違がそこにはあったといえるだろう。重要なのは、『民族』誌の編集作業を通して柳田が培ったであろう見識に対して、講座の出版を企図し、実際に原稿を依頼するという実質的な作業を念頭においた岡は、人類学・考古学に関しては柳田の人脈はそれほどではない、と判断したことである。

この時期の柳田の考古学への興味や関心はそれなりにあったのであるが、それはあくまでも雑誌への寄稿、編集といった、いわば表面的な関係で推移していたのであり、親しく入門・概説的な原稿を依頼し、またそれらの執筆者として複数の人物をバランス良く配置するといった実質的な面においては不十分だと判断されたのである。このことは柳田の内面と周囲からの評価との乖離を示しているように思われる。柳田自身の研究と考古・人類学研究は内実において交流や融合を示すような段階ではなかったことがうかがえよう。

この時期の柳田の考古学理解はどのようなものであったか、柳田自身の著作にはどのようなかたちでそれらが示されているのか、確認してみよう。

『民族』が刊行される以前の大正一二年（一九二二）に刊行された『郷土誌論』には次のような一節がある。

雨が多くて灌漑の盛な日本には、古人も其生活の痕跡を遺すことが容易で無かつたのです。我邦の考古学者は古墳家と名づけてもよい程に、此一件にのみ精力を集注しました。而も土を盛上げるとる工事は、時代によつて目的を異にしつゝ、殆ど現代までも続いて来て居ます。是も運んで来た土石の種類、或は底部の切込みの高さ、其他技術上の異同を調べたならば、やがては新旧の順序なども明かになると思ひますが、古墳と塚とは丸で別だなど、言ふ人が、大さや形や土地の口碑の類に絆されて、何度と無く無用の土を動かして失望して居るのはをかしいと思ひます。其と云ふのが上古を重じて最近千年の人の心の変化を顧みなかつた為で、官道の一里塚の双塚にして且つ偉大なるものもあり、或は又大事件を記念すべき念仏塚や供養塚には、数百千の人数を使った丁寧なものもあること、或は又古い事を忘れてしまつて、天然の丘かと

思つて之を祭場や住居に充てたり、其他既に存する封土に更に色々の変改を加へるなどの、久しく且つ複雑なる歴史のあることを思はぬ為であります。（全集三一―一七三）

出土物や遺跡の考察にあたって、それらが古代のある時期だけのものではなく、その後の「人の心」の変化を顧みることが必要だと柳田は言う。そうした「複雑なる歴史」を意識することが必要であると言うのである。こうした姿勢は昭和三年（一九二八）刊の『青年と学問』のなかの「旅行と歴史」にも受け継がれている。ここでは民俗学の必要性を説く前段に考古学の例を引いている。

文字以外の史料としては、是まで一番に人の興味を引いて居たのは、考古学即ち遺蹟遺物の比較研究であつた。又は生活技術誌（ソシアルテクノロジー）などと称せられる衣食技芸等の発達変化であつた。是等は何れも時が保存してくれた昔の生活の痕跡を頼りとして進むのであるが、其中でも一種最も豊富にして且つ確実なる遺物の、案外に顧みられなかつたものがあつた。それは何かといふと人間そのもの、朽ち残つた骨ではなく活きた人間の活き方である。（全集四―五四）

ここでの柳田の論旨は、文字以外の史料を用いる研究として考古学を挙げ、しかし、それ以上に顧みられていないのが、人間の活き方そのものである、とする。ここでは「朽ち残つた骨」に注目する考古学に対して、「活きた人間の活き方」を取り上げ、材料としていく営みとしての民俗研究の新しい優位性、必然性を説こうとしているのである。

こうした「朽ち残つた骨」と「活きた人間」という対比はいささか単純に過ぎるかとも思われるが、民俗研究の独自性や特徴をなるべく鮮やかに

かに印象づけようとする独特の筆法であつたといえるだろう。その前提として、遺蹟遺物に注目し、それらの比較から過去を解明する考古学的方法的な新しさを認め、それと対抗するかたちで民俗研究の必要性を説こうとしている。過去を考えようとする際に、文字による史料とその扱いを相対化する根拠として考古研究を挙げ、さらにそうした文字以外の史料のもうひとつの存在として「活きた人間の活き方」としての民俗の重要性を説くという姿勢がここには見出せる。

「活きた人間」というのは考古学を批判的に取り上げつつ、民俗研究の特徴を述べるときに別の箇所でも用いられている。考古学の材料に關しての踏み込んだ論評が「東北と郷土研究」（一九三〇年）でも行われている。それも確認しておこう。

…少なくとも考古学の取扱つてゐる遺物なるものが、縦にも横にも甚だ僅かなる一標本、所謂大海の一滴、九牛の一毛であるといふ謙遜の態度だけは必要だと思ひます。現に遺物といふ名こそ与へられませんが、人類学の取扱はうとしてゐる「我々活きた人間」も亦一種の遺物である。建て替はつても家は元の形、毎日炊いて食べても飯はもとの飯なると同様に、これから日の光を見る我々の赤ん坊とても亦遺物である。（全集二八―三〇六）

ここでは考古研究の根拠であり、主要な材料である遺物に「活きた人間」を加え、そうした生活の中で繰り返されてきたという性質を持つことで過去を研究する材料となり得るといふ主張が展開されている。そしてそうした繰り返しを確認できない考古学の遺物は時間軸においても空間的な広がりにおいても僅かな一点を占めるに過ぎないということを強調する。考古学批判としてはいささか乱暴であるが、柳田の意図は、生活のなかで繰り返されてきた慣習―ここでは家の形や食事、子育てを比

喩として取り上げている―は過去を残しているという点において、遺物すなわち研究の材料となるのだという点にあるだろう。

こうして見てくると、この時期の柳田は文献史学への対抗意識や不満に加えて、新しい歴史研究の方法としての考古学に対しても、その価値や意義を認めつつも異議申し立てをせずにはいらなかったものであり、それは新たに民間伝承研究、すなわち民俗学の重要性を提唱し、その確立をめざす中での一の方策でもあった。柳田民俗学の形成期において考古学は十分に意識されつつも、その批判をすることで民俗学の独自性を主張するといういささか奇妙な役回りを与えられていたといえるだろう。

③ 完成期―『民間伝承論』から戦後における提携の模索まで

昭和に入ると柳田の民俗学は徐々に完成へと近づいていく。『民間伝承論』（一九三四年）、『郷土生活の研究法』（一九三五年）といった概説書の刊行にそれはよくあらわれている。こうした概説書のなかでも当然、考古学に言及がなされている。

単なる成長の順序からいへば、考古学は特に形勝の地位を占めて居る。

その新興の気風は確かに次に生まれたる学問を誘導した。

しかも是が為に自分も亦大に成長して、後次第に連合混化の実を挙げ得たことも亦争はれない。〔全集八一―一二二〕

というのは『民間伝承論』の巻頭における散文詩のような序である。ここでは考古学が新興の学問として民俗学よりも先行しているという認識を示している。さらにこうした新しい学問の興隆によって歴史研究が新

しい段階に入っていくことを「…他的一方には考古学の知識も、古代史や他に史料の無い地方史の区域では、可なり鷹揚に援用せられて居る。是が人間の姿形として遣り伝はつて居る史料、もしくは国民の無意識に伝承した無形の遺物や、遺跡の上に乗って、手を伸したくなるのもやがてであらう。」〔全集八一―二九〕と表現している。新進の学問として考古学がまず起こり、民俗学もそうした歴史を考えていく際の材料の拡大に参加し、歴史研究の新たな方法として認められていくであろうという見通しである。

なお、一九三一年に発表された「郷土研究の将来」には「考古学は曾ては史学の補充を旨として居たのが、忽ち得意になつて人を先史無人の地に導かうとするのみならず、更に其方法は新たに生まれた人類学にも伝授せられて、頗る此あたりの縄張りを複雑なものとした。」〔全集一四一―一三三〕と述べられており、考古学と人類学とが相携え、また新しい領域の開拓をおこないつつあることに注意が払われている。こうした考古学への評価は、前節でも述べたように歴史を考える際の対象、材料の拡大を先行して果たしたという点に集中しており、その内実に踏み込むことは行われていない。むしろ、考古学の隆盛に続くとする意志の方が強調されているようにも思える。

こうした点は考古学に対して柳田民俗学が真の意味での協業や協力を考えるには到らなかったことを示しているように思われる。その背景には遺物や遺跡といった物質的な資料に依拠する考古学に対して柳田の民俗学が、精神文化にややもすれば偏りがちで、その方面の議論を優先させるかたちで成長してきたという点に留意すべきかもしれない。

しかし、こうした乖離は戦後になると変化を見せ始める。それは新たな学問というよりも人文学の新しい課題として「日本人とは何か」「日本人の起源」といった問題がさまざまな立場から論じられるようになってきたことがきっかけとなっている。戦前の制約がなくなり、日本人の起源

や特性に関する仮説や見解が提出されるようになっていくなかで、柳田は考古学にも再び関心を寄せるようになっていった。

それをよく示すのは、柳田が主宰していた民俗学研究所において行われていた談話会という研究会における発言である。これは一九五二年三月九日に小林行雄の『日本考古学概説』の書評とそれに続いて「考古学と民俗学」として話されたもので、その要約が雑誌『民間伝承』の一卷五号の「日本民俗学会報」に掲げられている。

私は近頃考古学の方面から遠ざかっていたが、この書物を精読して感じたのは、考古学が非常に進歩したということである。例えばわれわれが知っていた通説では、縄文式土器の文化は、弥生式土器の文化と、人種的にも異なるもののように考えられていたが、清野（謙次か―引用者注）氏らの人骨研究などと相まつて、一つづきの日本人のものと考えられて来はじめて。こうなると日本人の文化はこの土地から生まれたもので、他から移つて来たと考えないことだから、われわれの研究にも大きな影響がある。今後はこの学問の成果にわれわれの方も注意をはらわなくてはならない。ただ考古学の人たちもこちらの研究を参照してくれば、もつと学問が進むのではなからうか。例えば両墓制などがそれである。沖縄の洗骨が、もとは特定の高貴な人や、家の第一代のといった人に限つて骨を保存する一つの方法として行われたもので、それが後に一般に普及するようになったものらしいことがわかつてきた。古墳も、本来特定の人の祭壇であり、墓でなく塚として始まったものではないかと疑問が抱かれる。このような点で両方の学問は提携してゆく必要がある。今後は研究所の人たちも、考古学の成果に充分注意し、またこちらの研究も考古学に利用されることを考えて進めて行くようにしたい。

考古学が進歩したという柳田の感想を引き出した小林行雄の『日本考古学概説』は前年の一九五一年一月に創元社から刊行されたもので、縄文、弥生、古墳時代をそれぞれ、住居、服飾、習俗、葬制等に分けて概観している。六七にも及ぶ豊富な図版とともに「これから日本考古学の知識を得ようとする人々に向つて、現在の学界の水準がどういうところまで到達しているかということ、説明するために執筆したものである」と述べ、さらに「……いうまでもなく考古学の目的とするところは、文献史学・民俗学と並んで、歴史学の樹立を究極の目的とする研究の一分野であるべきである。」とし、「個々の遺物の説明をかなり省略して、それらが一つの文化現象として意味するところを前面に出そうと試みた」と「はしがき」で述べている。個々の出土遺物にこだわるのではなく、それぞれの時代の文化を大きくとらえようとする意図のもとに組み立てられたこの書物から柳田は大きな刺激を受けたのである。

さらに小林は序説において、

なお、本書が日本考古学概説と題して、奈良時代以後の文化に関する記述を含んでいないのは、決して奈良時代以降の文化現象が考古学の対象とはなりえないという意味からではない。遺物遺蹟によつて過去の文化の研究を行う考古学は、文献記録を資料とする文献史学、口承伝習をとり扱う民俗学と鼎立して、歴史学の独自の方法を形成しているが、方法の相異は必ずしも研究すべき時代の峻別を意味するものではないのである。

と述べており、この内容は柳田が昭和の初めに考古学の後を追つて民俗学の独自の位置を志向していた頃の主張とよく似ている。頁をめくつていた柳田は然り、と思つたのではないだろうか。

戦後の柳田民俗学の特徴はいくつも指摘できるが、そのひとつに民俗学の整備の傍らで、柳田自身が扱う時間軸が長く、特に「日本人の起源」を問うという面が顕著になっていったことが挙げられる。それは最後の著作となった『海上の道』（一九六一年）において最もよく示されているが、それ以外の著作物、編さん物にもうかがうことができる。

柳田と民俗学研究所に集った研究者とによって編まれた『日本人』（一九五四年）はその一つで、その中の座談会の冒頭で柳田は次のように発言している。

この日本人の起源の問題は他に譲るとして、この本では、その後の事実―この島に渡ってきたという事実から出発しなければならぬ。それから何千年たつかしらんけれども、その間、こういう性質だけは、渡来当時のもとの特徴そのまま、現在にまで残っているというものもありましょうし、それ以外にもこの島に住んでどれくらい向上したか、これだけの面積の上に散らばったがために、どういう現象を呈しているか、どういう日本人というものができあがっているか、これはおそらくは文献資料と考古資料だけで説明することができないと思う。⁽¹²⁾

ここでは日本人の起源というよりも日本列島上において日本人の性質がどのように醸成されていったかに着目すると述べている。その際には民俗研究が必要になってくるという宣言は戦前の『民間伝承論』の頃とそう大きく変わらない。そして日本人の性質という問題を掲げて研究を推進しようとした時、柳田は戦前と同じように考古学を意識する。しかしその前提には歴史学、考古学との連携があったであろう。戦後になって柳田はようやく考古学とも手を携えることができるという手応えを感じたに違いない。柳田民俗学は考古学を対等かそれ以上のパートナーと

することとなったのである。

このように見てくると、同じ新興の学として柳田が絶えず意識した考古学に対して、その存在を認め、その一方で限界も指摘しつつ、言及が続いている。概ね同じように新たな歴史研究の方法として民俗学を考古学に伍したものに育てていきたいという念慮のようなものが、昭和一〇年代以降の柳田には通底していた。

ただし、こうした柳田の願いにも関わらず、この時までの民俗学は考古学と比べると大きな違いも有していた。それは例えば、本稿の冒頭で触れたような大学という近代の学問のシステムには入り込むことができないままであったことや、民俗学が歴史科学か現代科学かといった性格規定に大きな振幅をはらんでいたことなどを挙げることができる。後者は近代の学問ならば、どこかしら問題として登録しておくべきことではある。また前者については大学というシステムの可能性をもう一度問うことが、現代においては必要であろう。戦後の柳田民俗学は制度やシステムのレベルでは大学以外の可能性を民俗学研究所というかたちで模索していたと言えないこともない。この点についてはまた別の角度からの考察を要するだろう。

おわりに

本稿では柳田國男の民俗学において考古研究がどのような位置を占めていたのか、柳田の学問形成を、考古学を参照軸としながら眺めることで考えてみようとした。柳田の知的営為の出発期においては対象へのアプローチの方法として考古研究がかなり意識されていた。雑誌『民族』誌の刊行とその後の形成期でも柳田自身、考古学に強い関心を持ち続けていたが、人脈を形成するまでには至らず、民俗学自体の確立を希求するなかで批判的な言及がくり返されていた。昭和一〇年代以降の完成期

では、考古学の長足の進展と民俗学が市民権を得ていく過程がほぼ一致し、そのなかで新たな歴史研究のライバルとしての意識が柳田にはあつたらしいことが見通せた。こうして柳田の言説や行動を考古学との関係に留意して振り返ってみると、一定の距離をおきながらも一種の信頼のようなものが最終的には形成されていったように思われる。

学問が近代化し、整備されていく過程は往々にして細分化や個別化である場合がある。しかし、ここで見てきた柳田の学問への希望や期待の中ではそうした志向は決して強くない。むしろ方法を異にすることを意識しつつも、塚や古墳、そして「活きた人間」、あるいは「日本人とは」といった普遍のあるいは、巨大な課題の前で複数の学問を必要とするという覚悟を常に柳田は持っていた。そのこと自体を学問の可能性として振り返るべきだとも思われる。

今後はここで検討した時期のさまざまな問題を考古学史や人類学史のなかで改めて捉え直すことが必要だと考えている。おそらく近代の学問が未分化であったという図式的な理解では不十分で、そうした未分化ゆえの可能性や未分化のように思われる段階に立ち戻つての問題意識や方法的な越境を確認、再評価していくべきなのではないだろうか。本稿はそうした大きな課題を意識化するための階梯でもあった。

註

- (1) 古くは一九六〇年の水野清一、大場磐雄による「考古学と民俗学」(岡正雄ほか編『日本民俗学大系(第一巻) 民俗学の成立と展開』、平凡社、一九六〇年、二二―三四頁)から、福田アジオ「考古学と民俗学―協業のための予備的考察」(『国立歴史民俗博物館研究報告』三五集、一九九一年、一八五―二〇九頁)、拙稿「生と性―考古学との協業への素描」(『東北民俗学研究』七号、二〇〇一年、五一―八頁)など。
- (2) 民俗学史研究においては、大藤時彦が、柳田と考古学との関係はとりわけ、その初期にあつては深いものであつたことを注意している。大藤時彦「日本民俗学史話」(三一書房、一九九〇年、二〇頁、参照。本稿はその検証という意味合いも持っている)。
- (3) 石井正己「石神問答」(『柳田國男全集(第一巻)』、筑摩書房、一九九九年、七八―八〇頁)。以下「石神問答」の内容の整理に関しては、この石井の解題に負うところが大きい。
- (4) 以下、『柳田國男全集』(筑摩書房、単行本)からの引用に際しては「全集巻数―頁数」と注記する。
- (5) 永池健二「雑誌『民族』とその時代」(後藤総一郎監修・柳田國男研究会『柳田國男伝』、三一書房、一九八八年、七三四―七七二頁)、七四四頁。
- (6) 岡正雄「インタビュー・柳田國男との出会い」(『季刊柳田國男研究』創刊号、白鯨社、一九七三年、一二七―一五五頁)、一三四―一三五頁。
- (7) 岡茂雄「『人類学・民族学講座』流産始末記」(同『本屋風情』、中央公論社「文庫」、一九八三年、九四―一〇七頁。元版初刊は一九七四年)、九五頁。
- (8) 前掲註(7)、一〇四―一〇五頁。
- (9) 『民間伝承』一六巻五号(一九五二年、日本民俗学会)、四四頁。
- (10) 小林行雄「日本考古学概説」(創元社、一九五一年)、二一―三頁。
- (11) 前掲註(10)、一四頁。
- (12) 柳田國男編『日本人』(毎日新聞社、一九五四年)、二五四頁。

(国立歴史民俗博物館研究部)

(二〇一五年七月一七日受付、二〇一六年一月二九日審査終了)

A Formation of Yanagita Kunio's Folklore Study and Archaeology Study

KOIKE Jun'ichi

This paper examines the remarks and activities of Kunio Yanagita to understand how his archaeological research affected the process of his developing folklore studies. In the early 20th century, when he started his academic pursuits, he relied mostly on archaeological approaches to research subjects. From the 1920s to the early 1930s, following the launch of the journal, “Minzoku (Ethnography),” he developed folklore studies. At that time, he still kept a strong interest in archaeology, yet did not go as far as building personal connections in the field. As Yanagita strove to establish folklore studies as an academic discipline, his efforts attracted much criticism. From the mid-1930s, at the final stage of his establishing folklore studies as an academic discipline, archaeology made great progress and, at the same time, folklore studies gained wide acceptance. During this time, Yanagita seems to have tried to make of folklore studies a new rival to archaeology in the field of historical research. Eventually, however, a relationship of trust was built between Yanagita's folklore studies and archaeological studies, despite the certain distance they kept from each other. Thus, the above analysis reconfirms the great difficulty in modern times of attaining interdisciplinary collaboration and integration.

Key words: “Ishigami Mondō,” “Minzoku,” the origin of Japanese, archaeology, historical research, modernization